



本場の
アフタヌーンティー

Vol.29

ロンドン・マリOTT・ホテル
カウンティ・ホール ザ・ライブラリー

*London Marriott Hotel
County Hall The Library*



▲ロンドン・マリOTT・ホテルはこのカウンティ・ホール内に 241 室を有する。「ザ・ライブラリー」からはビッグ・ベンを望むことができる。



◀ケーキはひとり4種類。中央に横たわるのはビッグ・ベンの形を模したケーキでこれは2人で仲よく分けて召し上がれ。すべて大ぶりで食べごたえあり。

▶この日のスコーンは、レーズン入り（ザラメがまぶしてある）と、奥に見えるスイートバジル入りの2種。クロテッドクリーム、イチゴジャムとともに、スイートバジル入りのスコーンにつけるためのレモンカードがサーブされていた。



「カウンティ」は地方行政の単位で、ロンドンのカウンティ・ホールは「ロンドン・カウンティ・カウンスル（LCC）」の庁舎として誕生。1911年に着工し、10年余りを経て主要部分が完成。その後、1936年から3年をかけて北側と南側にそれぞれ増築が行なわれたほか、1974年には「アイランド」と呼ばれる棟が追加された。ただし、アイランドは2006年に取り壊され、跡地にはパーク・プラザ・ウエストミンスター・ブリッジ・ホテルが建てられた。

6階建てカウンティ・ホールの主要部分のデザインを手がけたのはラルフ・ノット（Ralph Knott）。1878年、ロンドンのチェルシーで生まれたノットはシティ・オブ・ロンドン・スクールを卒業した後、建築を学び、エッチング（銅版画の作成）技術を修得。その腕をかわれて、バッキンガム宮殿の外観などを手がけた、アストン・ウェブ卿のもとで8年間働いた。当時の建築業界にあつては、デザイン

観光客としてであろうと、移住目的であろうと、まず訪れるに違いないロンドンの「名所」といえば、国会議事堂とその周辺。ビッグ・ベンの愛称で親しまれている時計塔（正確には「エリザベス・タワー」）の写真を撮ったあと、テムズ河に向かうと対岸に見えるのが大観覧車「ロンドン・アイ」だ。こちらも写真映えするので、ほぼ全ての人の携帯電話にデータとしておさまるのが決まりだろう。

その大観覧車の向かって右手に美しい大型建造物がある。「カウンティ・ホール」で、もともとロンドン全体を統括する組織の庁舎として、1922年、時の国王ジョージ5世列席のもとにオープンした。今回、取材班が赴いたのは、このカウンティ・ホール内で1998年より営業するマリOTT・ホテルの「ザ・ライブラリー」。ここでのアフタヌーンティーについて記す前に、カウンティ・ホールの歴史を駆け足で見えておきたい。

案公募の際、完成図などをエッチングで提出することになっており、ノットのエッチングはウエブ卿が前述のバッキンガム宮殿や、ヴィクトリア&アルバート博物館などのデザイン・コンペで勝利を得るのに大きな役割を果たたとされている。

1908年に独立し、E・ストーン・コリンズと共同で会社を設立したノットは、1909年、カウンティ・ホールのデザイン・コンペで優勝。若く29歳、無名に近いノットの快挙は大きな注目を集めたという。才能を認められ他の複数のプロジェクトを並行して進める中、1928年、カウンティ・ホールの追加工事が始まった。ところが、ノットは翌年の29年、ロンドン南部のモートレークの自宅で急死。一説によると、度々の飲酒が原因だったともされている。大きなプロジェクトを複数かかえるノットが、プレッシャーと闘う毎日を送っていたことは想像にたたくない。

ノットのデザインにより、今も美しい姿を見せるカウンティ・ホールだが、現在は行政組織の拠点としては機能していない。既述のLCCは後に「グレート・ロンドン・カウンシル（GLC）」となり、保守党政府と激しく対立。マーガレット・サッチャー政権と労働党のケン・リヴィングストン率いるGLCとの闘いは特に有名で、テムズ河をはさんで両者の攻防が繰り広げられた。1986年、サッチャー首相（当時）はついにGLCの解体に成功。しかし、それはカウンティ・ホールが本来の役割を取り上げられることを意味した。

大阪市の不動産会社、白山（しらやま）殖産が1993年にカウンティ・ホールを買収。同ホールは商業施設としての歩みを本格的に開始することになる。現在、テムズ河に面する部分には水族館「シーライフ・ロンドン・アクエリウム」や、「ロンドン・ダンジョン」、「シニレック・アドベンチャー」、「パディントン・ベア・エクスペリエ

ス」といったアトラクションが並び、家族連れなどのグループ客、観光客でにぎわう。さらにマリOTT・ホテル、プレミア・インが宿泊客を迎え、カウンティ・ホールの東側では複数のレストランが食事の場を提供している。

さて、取材班が訪れた「ザ・ライブラリー」に話を戻そう。

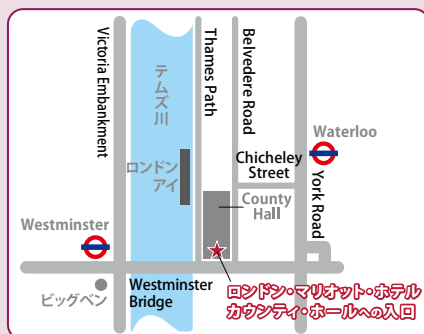
エドワード・アン・パロックと呼ばれる建築スタイルのカウンティ・ホール内は、重厚さと気品あふれる美を兼ね備えた造り。その一角にある「ザ・ライブラリー」は名前の通り、かつてGLCの図書室だった部屋で、並んでいる書籍もほぼGLC解体当時のままという。窓外にはテムズ河沿いの眺めがひろがり、贅沢な気持ちにさせてくれる。テムズ河沿いをそぞろ歩く大勢の人々の声や、ウエストミンスター・ブリッジの喧騒とは無縁の静かな空間でゆったりとアフタヌーンティーを味わえる希少な場所だ。

サンドイッチやキッシュなどのセイボリーから始まり、スコーン2種、そしてケーキ各種と伝統的なメニューからなり、ウエストエンドの有名ホテルのアフタヌーンティーがひとり90ポンドを軽く超える昨今にあつて、70ポンドという価格はきわめて良心的。スタップも丁寧かつフレンドリーなサービスを心がけてくれ、居心地も良い。ただ、日本人にとってはケーキ類がかなり甘い。どのケーキも手が込んでいてクオリティは高いだけに、もう少しだけ砂糖を減らしてくれれば、というのが正直な感想だった。

とはいえ、ビッグ・ベンを眺めながらアフタヌーンティーを楽しめるという立地の良さの前では、ケーキ類の甘さなど小さなこと。例えばここにサブライズで招待すれば、日本からの来客はいうまでもなく、ロンドン在住者にも喜んでもらえることだろう。ウエストミンスター界隈の観光と組み合わせるのもお勧めだ。一度足を運んでみてはいかがだろうか。

Travel Information

※情報は2025年9月30日現在のもの。



The Library, London Marriott Hotel County Hall

ザ・ライブラリー
ロンドン・マリOTT・ホテル
カウンティ・ホール

London County Hall,
Westminster Bridge Road, London SE1 7PB
Tel: 020 7902 5535

www.thelibraryatcountyhall.com/our-menus

■アフタヌーンティー 毎日 12:00 ~ 17:00

■テーブルによっては、角度の関係で着席した状態ではビッグ・ベンを見ることができない場合もある。着席前に、できればビッグ・ベンが見えるテーブルにしてほしいとフロアスタッフに頼めば、願いを叶えてもらえるかも。

■紅茶、およびスコーンやケーキ類、サンドイッチ類は、基本的にお代わり自由。逆に、スコーンやケーキ類を食べ切ることができなかった場合、持ち帰ることができるので、フロアスタッフにその旨を伝えよう。持ち帰り用の袋も素敵。

■カウンティ・ホールの東側では、スパニッシュ・レストランのほか、次の日本食レストランが営業中。オープン時間の確認・ご予約はそれぞれのウェブサイトから。なお、入口はどの店も Belvedere Road 沿いに面している。

◆寿司・居酒屋メニュー「Sagamiya」
<https://sagamiya-london.jimdo.free.com>

◆大阪お好み焼き「Okan」
www.okanlondon.com/okan/south-bank

◆広島お好み焼き「Jeux Jeux」
<https://southbank.london/eat-and-drink/jeux-jeux>

◆寿司・天ぷら・土鍋ごはん「Donabe」
<https://www.hannahrestaurant.london>
※旧「Hannah Japanese Restaurant」



▲1998年9月にオープンしたロンドン・マリOTT・ホテル・カウンティ・ホールの正面玄関。6階にはスイミング・プールもあり。
▶入口はウエストミンスター・ブリッジ・ロードに面している。



◀カウンティ・ホールのデザインを手がけた、ロンドン出身の建築家ラルフ・ノット Ralph Knott (1878 ~ 1929)。北アイルランドの議事堂があるストーモントの各部署が入るオフィスビルのデザインなど、大プロジェクトに携わる一方、自分が卒業したシティ・オブ・ロンドン・スクールの戦没者追悼パビリオンの建設時には無償でデザインを担当した。